

令和4年度 学校推薦型選抜 I 教科別推薦入試

言語教育コース 国語教育系 小論文

別紙の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

- ① 筆者は本文で、「コトバ」の重要性を問題提起していますが、あなたはどのように考えますか。自らの体験もふまえてまとめなさい。
(筆者の意見に賛同する立場からでも、賛同しない立場からでも、構いません。)
- ② あなたが、将来、学校で国語の授業を行うことになったときに、どのようなことを大事にしたいと考えますか。①で書いたことをふまえて、論じなさい。

全体で、600字以上800字以内で書きなさい。下書き用紙、答案用紙ともに回収します。下書き用紙は採点の対象にはしません。

受験番号

言葉は用いるものであるだけでなく、出会う相手でもある。言葉は学ぶものであるだけでなく、生きてみなければならぬ人生からの問いでもある。哲学者の井筒俊彦は、あるときから、言葉とは別の意味を込めて「コトバ」と書くようになった。コトバとは、言語を包み込みながら超えて行く意味の顛われを指す。

人は、言語だけでなく、さまざまなコトバから意味を感じ取っている。ある人にとっては音がコトバであり、別な人には香りがコトバになることもある。誰がつくったのか花言葉という習わしも、花もまた、一つのコトバであることを証している。

知命に近くなってきた頃から、詩を書くようになった。書こうと意志したのではなかった。詩を書かねばもう、一歩も前に進めない、そう感じていた。伝えなくてはならなかったおもしろい、あるいは受け止めきれなかったものの断片が、言葉にならず、コトバのまま、自分のなかで生きているのを無視できなくなっていたのである。

気がつけば、一冊の詩集になるほどの作品が手元にあった。それまでは、一度詩を書いたことがあるだけで、詩が自分の人生にこれほど強く結びつくとは考えてもみなかった。たとえ詩を読んでも、何かのためであって、心から味わうということではなかった。

真の意味で詩と出会うには、幾多の詩集を繙くだけでは十分ではない。拙くてもよいから詩を書いてみなくてはならない。人は、真に必要な言葉を自分の手によって紡ぎ出すという、ある種の本能を宿している。

ここでの詩は、必ずしも口語自由詩に限らない、短歌、俳句はもちろん、詩情を宿した散文もまた、詩であるといつてよい。

詩は言葉だけでは成立しない。そこでもっとも強くはたらくのは沈黙であ

り余白である。言葉ではなく、コトバなのである。

コトバを中軸にして言葉によって描き出された、文字による絵画、それが詩なのかもしれない。絵を見て感動したときの心持ちが、探していた詩に出会ったときの感慨に似ているのは偶然ではない。絵は、色と線によって紡がれた詩でもあるからだ。

詩を書くようになると、詩に出会うようになる。詩との出会いを見過ぎさなくなる。どこからか風が運んでくる香りに季節の到来を感じるように、詩によって運ばれてきたコトバに自らの人生の季節を照らし出されることがある。

わたしはひとしずくの涙

ひそかに流された涙の そのなかの

いちばん赤い 深紅の哀しみ

土のなかに深く深く浸みとおって

四月にふたたび よみがえったの

韓国の詩人姜恩喬の「つつじ」と題する作品にある一節である。訳者は茨

木のり子。「わたし」と記されているのは「つつじ」で、日本では白いつつじも目にするが、韓国で、つつじといえは、深紅のそれをいう、と茨木のり子は書き添えている。

人生の冬、誰もいないところで誰かが流した涙が、春になり、「つつじ」となって人を慰める。悲しみを真に癒すのは、もう一つの悲しみだというのだろう。

この詩に出会ったとき、自分がちに詩を書くようになるなどとは思ってもみなかった。しかし、この一篇に出会い、悲しみに色があることを知った。そして、悲しみは種子であり、季節がめぐれば、それは花となって新生することを知った。

私たちは世界を理解するために学校で文字を勉強する。だが、それは始まりに過ぎない。学校をいつか卒業せねばならず、誰しもが自分の人生を生き始める。

日々の生活は、言葉によって導かれる。だが、人生という旅を歩き通すためには、言葉が読めるだけでは十分ではない。大切な人の心にあるおもしろい、自分の心の奥にあるものも、言葉だけではなく、コトバの姿をしていることが少なくないからである。

詩とは、言葉によってコトバを学ぶことにほかならない。詩とは、コトバの助けを借りて、言葉にならないものを言葉によって表現しようとする無謀な試みでもある。

若松英輔 「言葉によってコトバを学ぶ」

